

店頭から
「こんにちは」
第28回

おクスリ好きの落とし穴
心身に負担をかけた
薬疹のケース

おクスリ好きの日本人……。ただ、服用すればいいというわけでもありません。実は…。

赤い斑点が消えない…

ひと昔前の話。次のような話をよく、耳にしたものです。「かぜを引いたら、治った」「疲れがヒドイので、ビタミン剤の点滴をして、楽に」最近では治療方針が変わったのか、あまり聞かなくなりました。

ところが、「病院へ行ったのに、おクスリ1つ寄こさない」とブツブツとっている人が。家族の分までと思えるくらいの湿布薬を、リュックサックに詰め込んでいる人もいます。日本人は何と、おクスリが好きなんでしょう…。かぜを引いたという50歳代

の女性が、テレビCMで有名なかぜグスリを服用した例があります。しばらくすると、からだに赤い斑点が出てきて、痒くなってきたといいます。

喉がサワサワして咳が出るので、再び、同じおクスリを服用。結果、赤い斑点は首からアゴまで出てきたとか。

ただ、咳もひどくなり、内科へ。診断は、「かぜかもしれないし、溶連菌感染症かもしれない」とのこと。抗生物質と咳止め、かゆみ止めの軟膏を処方されたそうです。

それでもなお、赤い斑点は色が濃くなり、拡がりました。不安になったものの、日曜日だったので、今度は休日急患センターへ。するとまた、

咳止めのおクスリが処方されました。

必要なときこそ利用を

さて、薬疹が疑われるのなら、一切のおクスリをやめておいたほうがいいでしょう。最初のおクスリで出た症状が、追加したおクスリによって、さらに悪化するかもしれないことは、容易に推察できます。

ここでもし、「薬疹の可能性があるから、おクスリはやめて、少し様子を見て、もう1度、診察にいらっしゃい」と指示することに対して、医療保険の高い点数がついたとしたら？ 上記のような処置はしなかったでしょう。困り果てて、相談に来られ



たので、「検査をしても異常なしとのこと。少し様子を見ましょう」と伝えました。すると、納得したご様子。

3日後、「随分と楽になり、赤味も収まってきました」と、お礼をいいにいられたのです。おクスリは、必要なときには、きちんと服用し、のんではいけないときには、ピタリとやめる――。

こういうことが素直にできれば、日本の医療費が抑制できます。

何より、心身に余計な負担をかけず、健康で長生きできるのではないのでしょうか？



宮川薬局（宮城県仙台市）代表
薬学博士・薬剤師
みやがわとしじ
宮川季士先生
プロフィール／1976（昭和51）年、東北薬科大学卒業。'78（同53）年、同大学大学院修士課程修了。'87（同62）年、薬学博士学位。
地域に根ざしたおクスリ屋さんとして、多くのファンが。
「季節の変わり目です。体調管理は万全ですか？」